

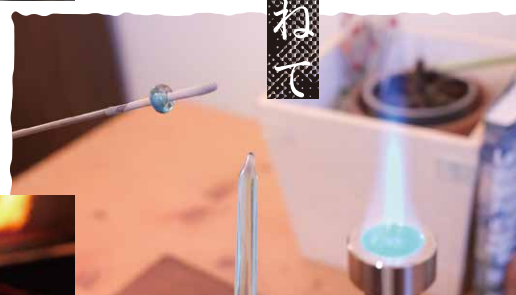
HATSUKAICHI

Craftsman...



工房と職人を訪ねて

woodworking
reproduction
furniture
pottery
metal
glass
bag



廿日市市産業まちづくり委員会

廿日市市産業まちづくり委員会とは、
廿日市市、市内経済団体、市内観光協会、金融機関など、官民を挙げて
廿日市市の産業振興に取り組む団体です。

〒738-0015 広島県廿日市市本町5-1 廿日市商工会議所内
TEL／0829-20-0021

制作／株式会社DoTS、株式会社 広島ホームテレビ
ライター／時盛郁子

冊子内の詳細情報は
ウェブマガジン
「ひろしまリード」に掲載



※紹介している内容は2026年1月取材時点のものです。掲載後内容が変更している可能性があります。

PROFILES

- P05 吹きガラス工房 Fuji321
藤島 孝臣さん
- P07 みやじまガラス工房 Fizz Glass
横田 光史さん
- P09 いゑもり
矢竹 純さん
- P11 la forgerone décoration
岡本 祐季さん
- P13 自在窯
出嶋 正樹さん
- P15 合同会社とこらぼ
金澤 萌さん
- P17 竹庵
山下 陽子さん、張 福文さん
- P19 snug
IRONWORKS & WOODWORKS
上村 敦芳さん
- P21 sumu.
杉原 祥太さん
- P23 一枚板のテーブル工房 きくら
常藤 辰徳さん
- P25 野地木工所
野地 由孝さん
- P27 Sunny.Labo
岩田 勇真さん
- P29 Crude.yamada
山田 文子さん



工房と職人を訪ねて

HATSUKAICHI
Craftsman...

手のひらから生まれる物語。

雄大な中国山地と、陽光きらめく瀬戸内海。

この豊かな自然に抱かれた廿日市市は、古くから「木工のまち」として知られ、ものづくりの精神が深く息づく場所です。

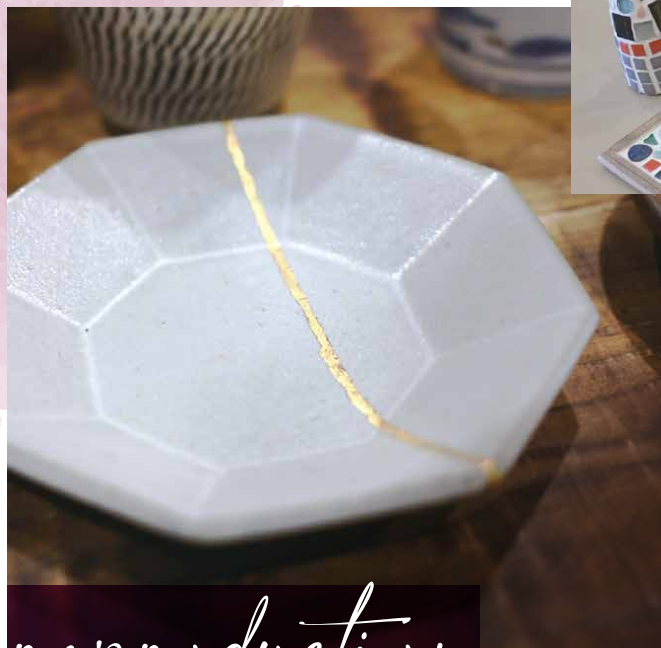
このまちには、私たちがまだ知らない、素晴らしい才能が隠されています。伝統を受け継ぐ木工職人から、土をこね、炎と向き合う陶芸家、そして金属やガラスに新たな命を吹き込むアーティストまで。彼らは日々、何を想い、何を感じながら、その作品を生み出しているのでしょうか。

この冊子は、そんな職人たちの工房の扉をそっと開き、彼らの情熱、記憶、そして未来への夢に光を当てる旅への招待状です。一つひとつの作品に込められた物語に触れることで、廿日市というまちの奥深い魅力と、ものづくりの無限の可能性を再発見していただけると信じています。

この一冊が、あなたと職人、そして職人同士をつなぐ架け橋となり、新たな出会いや創造が生まれるきっかけとなることを、心から願っています。

金属

metal



reproduction
再生



木工
woodworking

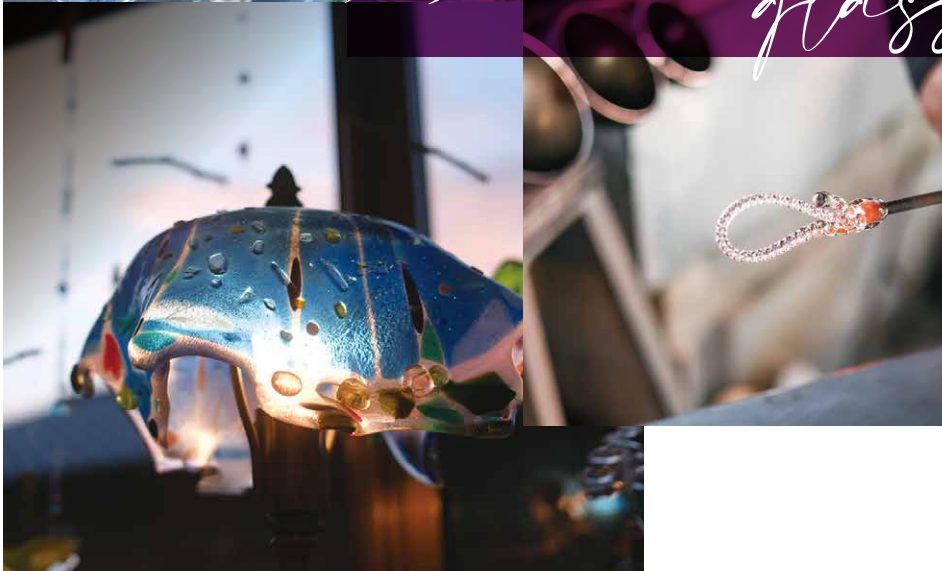


家具
furniture

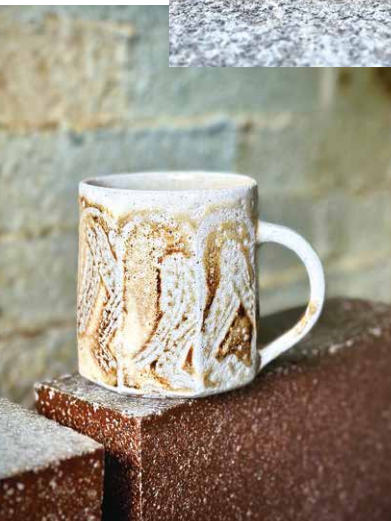


ガラス

glass



陶芸
pottery



鞆
bag



ガラスの力を信じて任せる

「10分の勝負」で個性ある器を



吹きガラス工房 Fuji321

藤島 孝臣 さん



「窯の中の温度は1300度くらい。窯から出して時間を置いたり、何かに触れさせたりすることでガラスは固まっていきます」。説明しながら、棒の先にクルクルとガラスを巻く藤島孝臣さん。熱せられオレンジ色になっていたガラスの色が、瞬く間に透明に変わっていきます。「この状態だと、約800度」。作業台にガラスを当てると、「コン」と音がします。水あめ状のガラスが固まるまで約20秒。想像を超える、その速さに驚きます。

まるで「手品のよう」な
吹きガラスに魅せられて

子どもの頃から、キラキラ光るものやガラスが好きだったという藤島さん。通学路でガラスのかけらを見つけると、拾っては太陽にかざして眺めていたそうです。大学卒業後は、自動車のカスタムを行う仕事に。しかし、休日に遊びに行った「ガラスの里」で、吹きガラスの製造工程に心を奪われたといいます。「吹きガラスの窯の前で、職

人さんたちがコップを作っていたんです。10分くらいで一つの作品ができていて、手品みたいで。自分もやってみたくて、すぐに仕事を辞めて沖繩に行きました」

沖繩を選んだ理由は、海が好きだったことと「自分の性格上、つらいことがあつたら逃げてしまうから」。飛行機は使わず、車に日用品を乗せて下道とフェリーで移動することとで「簡単には帰れない」と自分を追い込んだそうです。沖繩では約10軒の工房を見学。海のそばに立つ、オープンして3カ月ほどの工房に頼み込み、弟子入りました。

耳慣れない方言や、職人の世界の厳しさ、広島を離れた寂しさ。最初の半年は、休憩時間に海を見ながら「帰りたい」と泣いたこともあったそうです。しかし、沖繩だからこそ得られた経験もありました。「僕が修業していたのは、国際通りで売られているようなガラスのお土産を作る工房でした。大量に作るから、速さを求められる。制作のスピードは今に生きていると思います」

10年ほど修業を続け、広島に戻って約2年間、ガラス作家の故・松木倭帆さんに師事。技術とデザインにさらに磨きをかけ、2014年に独立しました。

人の手とガラスの力で
暮らしになじむ器を作る

工房には、皿や花器、小さなオブジェなど、さまざまな作品が並んでいます。透明はもちろん、白や黒、落ち着いたグリーンのものも。暮らしになじむ自然な色合いは、どこか温かな雰囲気を感じさせます。テーブルの上のワイングラスは、首をかしげて隣のグラスに話しかけているよう。同じシリーズでも、

器の口の広がりや脚の高さ、模様などが少しずつ違うのが藤島さんの作品の特徴です。

「今は器をセットで買う方が少なくなってきたので、きつちりと形をそろえるのではなくて、使う方それぞれの好みに応じて選んでもらえるものを作りたいと思っています。す。お皿は正円ではなく、あえて少し楕円に。人が作るからこそ出る、味のある形を大切にしています」

しかし、その形は人の手だけで生み出せるものではないそう。「ガラスの仕上がりは、作る前にある程度予想することが出来ます。でも、その仕上がりを自分で作り出すと作為が生まれてしまう。自分は少し力を抜いて、重力や遠心力を利用しながらガラスに任せることも大切です。気候やガラスの温度に息を合わせて、うまくいった、次はこうしてみよう、というのを10分おきに繰り返していく。スポーツみたいですよ。本当に難しく、日々勉強です。でも、それが面白い」

藤島さんの作品には、広島なら



ではの素材を取り入れたものもあります。カキの殻を炭にしてガラスにまといわせた器の質感は、まるで陶器のよう。宮島の寺院で祈祷してもらった折り鶴の灰を閉じ込めたリングスタンドは、内側から光を放つような、幻想的な美しさです。

廿日市市は「作品を発信しやすい場所」と藤島さん。「宮島周辺のイベントには、世界中からお客様が来られます。僕は英語が話せないけど『どこから来たんですか』とは聞くようにしています。この間はブラジルから来られた方が花瓶を手にとってくれました。

自分の花瓶は地球の裏側でどんな植物を入れてもらって、どこに置かれるんだろうって。想像すると面白いですよ。すごく夢がある場所だと思っています」



吹きガラス工房 Fuji321

・所在地／広島県廿日市市原83-8
・TEL／090-3790-7065
・営業時間／訪問時は要事前問い合わせ
・定休日／訪問時は要事前問い合わせ
Instagram: @fujisan2hon1

日常のふとした瞬間にさりげない輝きと

温かな思い出を



みやじまガラス工房 Fizz Glass

横田 光史さん



宮島の町家通りにたたずむ「みやじまガラス工房 Fizz Glass」。
店の中に入ると、光を受けてきらきらと輝くガラスのアクセサリーやモビールなどが並んでいます。
この店を営むのは、宮島で暮らしながらガラス作品を手作りする横田光史さん。広島県出身で、約12年前に店を開くとき、宮島へ移住してきました。

宮島の自然と

つながる色を取り入れて

「実家がガラス店だったので、子どものころからガラスは身近な存在でした。父はステンドグラスを作って販売していて、昔から『自分もいつかガラスで何か作れたらいいな』という気持ちがありました」と横田さん。ガラス細工の技術は、機械を購入した工房で教わったり、本を読んだりして習得したのだそう。「すてきな」思う作品に出合ったときには、その作家に会いに行き、作品や技術について意見交換をしたことも

あったそうです。

宮島をぐるりと囲む海、豊かな緑、毎日違う表情を見せる空……。作品には、宮島の風景とリンクする色を取り入れています。鮮やかな色の作品も、丸みを帯びた優しそうな表情に仕上がるのがガラス細工の魅力の一つ。「ガラスが『こんな形になりたい』と言っている方向に仕上がりを持つていくのが僕の仕事。宮島には自然があふれていて、毎日感じるものがたくさんあります。ものづくりに最高の場所、贅沢をさせてもらっています」

横田さんの妻・Masukoさんが作るビーズ「地球玉」も、宮島の自然にインスピレーションを受けて生まれた作品。青や緑などのガラス



を溶かして幾重にも重ねることで、幻想的な色合いを作り出しています。「愛のうた」や「美しい泉」、「そら」……。一粒ずつに付けられた名前から、Masukoさんの宮島への愛情がひしひしと伝わります。

使う人や日々の生活を きらりと引き立てたい

おみやげや贈り物に人気なのは、イヤリングやピアスなどの小ぶりなアクセサリー。鹿の角をモチーフにした宮島らしいデザインのものもそろえています。

「目指しているのは、アクセサリーを着けてくださる方をさりげなく引き立てるような作品です。派手になり過ぎず、その方がちょっとキラツと、輝いて見えるようなお手伝いができたらと思っています」。同じデザインで作られていても、色の出方やガラスの丸みはさまざま。使う人の個性に寄り添って、くれそうな作品を選ぶのも、楽しみの一つです。

日が暮れてくると、店内では横田さんが作ったランプが存在感を増します。ガラスを重ね合わせて窯の中で融合させる「フュージング技法」で作られたランプシェードは、ぼつとりとした質感が魅力。「お気に入りのランプで、より一層くつろいだ時間を過ごしていただけたら」。ランプシェードのモチーフも、紅葉や桜、海などの宮島の自然です。

横田さんとMasukoさんは、ガラスの製作体験にも力を入れてきました。現在体験できるのは、フォトフレームの飾り付けやクリスマス

タルガラスのサンキャッチャー作りなど。一番人気の宮島ビーズのグレスレット作りでは、30色以上のガラスから好きなものを選び、バーナーで溶かして金属の棒に巻き付け、オリジナルビーズを作ることができます。「手作りしたものを持ち帰ると、記憶と日常がパツとつながりますよね。旅先での思い出が、いつも自分のそばにいてくれるような」と横田さん。「旅行が終わってからも、グレスレットを身に着けたり、サンキャッチャーの光が部屋中に広がったりしたときに『これ宮島で作ったよね』と思い出していただけたらいいなと思っています。そして、『また宮島に行こうね』と思ってもらえたらさらにうれしい。たくさんの方にお店に来てほしいという思いで宮島に店を開きましたが、今はこの体験が『宮島に行きたい』と思ってもらえるきっかけの一つになることを目指しています」

ガラスの魅力を尋ねると、「やっぱり、キラツとした光がきれいな



みやじまガラス工房 Fizz Glass

・所在地／広島県廿日市市宮島町557-1
・TEL／080-6304-2397
・営業時間／10:00～17:00
・定休日／不定休
公式サイト／<https://fizzglass.stores.jp/>
Instagram: @fizzglass

暮らしの中で磨かれ続ける

モダンで遊び心ある銅器を



いゑもり

矢竹 純さん



工房の棚に飾られた、青い湯沸（たぎわい）。ふつくらしたフォルムと深海のような色に思わず目を奪われます。「コーヒーやお茶が好きなので、飲み物に関する道具をよく作ります。好きなものだと、『ここがこんな風だと使いやすいよね』とイメージも湧きやすいので」と矢竹純さん。廿日市栗栖の鍛金工房で、妻の葵さんとともに銅の生活工芸品を制作しています。

高校から美術の道へ 金属工芸との出会い

東京都出身の矢竹さんが金属工芸に出合ったのは18年前。美術に興味をもって進学した、東京都立工芸高等学校でのことでした。「絵が好きで進学したのですが、ジャンルの幅広さゆえの難しさや上手な人の多さに気づかれました。そんな中で興味を持ったのが、授業で習った金属の立体物。細かい作業で、時間をかけて何かを作るというのが僕の性格にマッチしていて、これがいいなと」

授業で鍛金技法も学びましたが、「最初はあまりピンとこなかった」そう。「板が立体になつていくイメージが全く湧かなかったんです。叩いて、立ち上がらずにひたすら伸びていく。当時はよく分らないまま授業が終わってしまったので、鍛金は面白くないと思っていました」

高校時代はアクセサリーやリーフに使われる彫金技法を学び、広島市立大学芸術学部で金属造形専攻へ。授業で再び鍛金に触れ、その面白さに気づいたそうです。「叩き方や器が立ち上がる仕組みを基礎からもう一度教えてもらって『ああ、こういうことだったのか!』と分かって。そこからどんどん楽しくなつて、彫金と鍛金を組み合わせた作品を作るようになりました」

大学卒業後は、200年以上続く新潟県の伝統工芸会社就職。金づちで銅板を打ち起こし、叩きながら縮めていく「鋳起（くわき）」の技法を約7年学び、2022年に独立しました。

素早い判断と化学変化が 作品の表情を生む

「作品を作るときに心がけているのは、まず使いやすいこと。そのうえで、自分なりの表現として少しモダンな雰囲気を加えたいと思っています」。キューブのような形のポットや多角形の急須、白と青のコントラストが美しい、流水をイメージしたドリップポット。端正でいてどこか温かい作品は、現代の暮らしにすっきりと溶け込みます。

デザインを考えるとときは、美術館で鑑賞した違うジャンルの作品や、アンティーク市で購入した陶器などを参考にすることもあるそう。「動植物が好きなので、生き物にインスピレーションを受けたものも

ありますよ」。矢竹さんが見せてくれたのは、ニシキゴイの模様のぐい呑み。金づちで連打して作る玉を連ねてうるこのような質感を作り、その後、赤、黒、銀の色を引き出していくそうです。

「銅を叩くときには、狙ったところに的確に金づちを当てる技術が必要です。ただ、叩きすぎると硬くなつて模様がなくなったり歪んだりしてしまうので、素早く判断しながら進めていきます。銅はすぐくさびやすく、酸化を利用した着色の技法がたくさんあるのも面白いところ。例えば硫黄につけると黒、バーナーで熱し、ホウ砂水溶液に浸けて急冷すると赤。銀の部分はスズを表面に塗ってメッキしています」

この作品の場合、形を作るのに1日、色付けには3日ほどかかったそう。「鍛金と聞くと金づちで金属を叩いているイメージが強いと思うのですが、作ったパーツを組み合わせた、表面を磨いたり、いろいろな工程があります。技法も



たくさんあつて、それを掛け合わせることでもまた新たな表現を作っている。僕は色を組み合わせるのが好きなので、動物の柄のような遊び心のあるものも作っていきたくて考えています」

イベントや工房での作品販売に加え、オーダーも受け付けている矢竹さん。一生ものとして作品を買う人も多く、「手で作っている強みを生かして、ちよつとしたアレンジや色の変更など、一人一人の理想に応えたい」と話します。

「僕は、銅器は美術品ではなくて工芸品だと思っています。新品のきれいな方がいいですが、傷が入ったり、

火にかけてススがついたりしたのも格好いい。丈夫なのでたくさん使つて、味が出てくる様子を楽しんでいただきたいです」

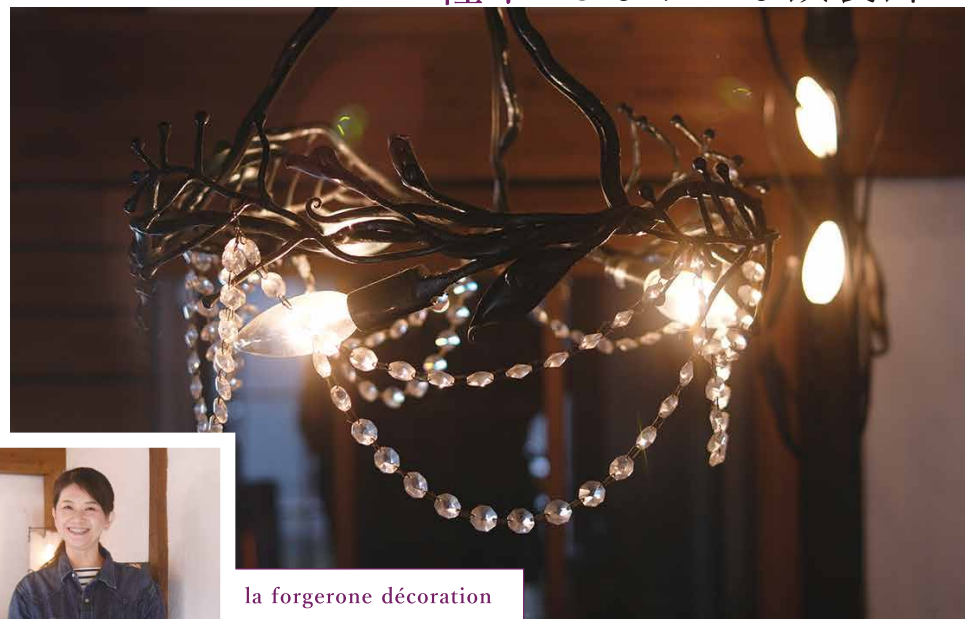


いゑもり

・所在地／広島県廿日市市栗栖260-1
・TEL／080-3490-3921
・営業時間／完全予約制
・オンラインショップ／
<https://iemori.base.shop/>
Instagram: @iemori_duo

軽くてしなやかな鉄装飾で

幸せな光景にそっと寄り添う



la forgerone décoration

岡本 祐季さん



廿日市市内にアトリエを構える鉄装飾家の岡本祐季さん。朝露がこぼれる一瞬をとらえたようなシャンデリアや蝶が休息に訪れたようなオブジェ、花が咲いたようなフロアライト……。岡本さんの作品を見ていると、その材料が硬く重たいものであることを忘れてしまいます。熱して打たなければ曲げることはできないはずなのに、鉄の植物も蝶も、ゆつくりと動いているよう。そう錯覚してしまうほど、軽やかで凛とした空気をまとっています。

「不思議な照明」に心を奪われて鍛冶の道へ

岡本さんが鍛冶の世界に飛び込んだのは約30年前。証券会社で働いていたころ、週に何度も通っていた広島市内のカフェで出合った一つの照明がきっかけでした。不思議な雰囲気惹かれてオーナーの故・光村孝治さんに作者を尋ねると、「わしが作った」。自分も作ってみたいという一心で、その場で弟子



入りを申し出たそうです。すぐに断れましたが、諦めず何十回も志願。約9カ月後にようやく弟子入りを許され、光村さんのアトリエでの修業が始まりました。

鍛冶の技術を覚える方法は、「見て覚える」のみ。ハンマーと鉄の棒を渡されて「こうやって叩くんだ」と教えてもらっても、叩き方が分からない。叩いた跡はついても、「打てていない」と言われる。「今振り返ってみると、大変な日々でした。でも、諦めきれなかった。」「向いていない」と言われても鉄を打ち続け、気づけば一日5回しか振れなかったハンマーを一日中振れるようになっていました。光村さんの元での修業は約10年間。



2008年に独立し、現在の場所にアトリエを設立しました。
さらなる安らぎを生む心地よい作品を届けたい

制作のテーマは「鉄の紡ぐ、光と影」。無機質な鉄の印象を覆すような繊細さや浮遊感が岡本さんの作品の特徴です。「昔からレース編みやビーズ細工、裁縫が得意でした。鉄で好きなものを作ったら、やっぱりそれも繊細な雰囲気だった。『そんなものは鉄じゃない』と言われたこともありましたが、徐々に受け入れられて自分の作風になっていきました」。基本的

に設計図は作らず、頭の中のイメージを少しずつ形にしていくことが多いそう。鉄にはない透明感を生み出すため、ビーズや樹脂を組み合わせたり、彩色を行ったりすることもあります。

岡本さんの作品の一つに2019年に販売を開始した「ゆきばん」があります。元になっているのは、師匠のレストランで使われていた手作りのフライパン。岡本さんも独立後に自分のためのだけのフライパンを作っていたそうです。友人に何度「欲しい」と言われても「これは師匠と私の思い出」と作るつもりはなかったのだとか。しかし、「こんなに何回も欲しいと言ってくれているのだから」と1枚販売すると、その友人はフライパンをとても喜び、愛用してくれたそう。その姿に心を動かされて友人や知人への販売を始めたところ、「これで調理するといろいろなものがおいしくなる」と評判に。約4カ月で200枚の注文がありました。

すると、瞬く間に日本全国から注文が入る人気商品に。「一般販売を始めたきっかけは新型コロナウイルスの流行でした。大きなオブジェの発注もなくなり、みんなに喜んでもらうために私は何が作れるかと考えたとき、『ゆきばん』にしよう。それまではきれいなものを作ることを追求してきましたが、『おいしい』『感動の一つで、喜んでいただけることが私もうれしかった。』『うれしい』『循環が起きるなかで、私は作品を通して生まれる団らんや温かい時間を提供したいのだと気づくことができました』

la forgerone décoration

・所在地／広島県廿日市市(詳細非公表)
・MAIL／la_forgerone@forgerone.com
公式サイト／<https://forgerone.com/>
Instagram：@la_forgerone

ことも多い岡本さん。病院のオブジェや商業施設のエントランスなど7mを超える大きな作品から、カフェの椅子まで、日常生活のあちこちに作品が溶け込んでいます。「約30年続けてきても、できるようなになることがまだ増えるのが楽しい。これから作ってみたいのは、ホテルや公園のオブジェ。誰かを迎えたり、人が集まったりする安らぎの場所に作品を飾っていただけならともううれしいなと思っています。そこに作品があることで、もつと心地よく、ほっとする時間が流れるようなものを作っていけたら」

「偶然性」を味方につける

ただ一人に届く景色を求めて



自在窯

出嶋 正樹さん



廿日市市津田と栗栖を結ぶ県道30号をそれ、山道を上っていくと現れる1棟の建物。そのそばには、レンガがきつちりと積まれた2基の窯がたたずんでいます。2012年に、出嶋正樹さんが開いた「自在窯」。現在はソーダ焼成と呼ばれる技法を中心とした作品づくりを行っています。

想像を超える景色を生む ソーダ焼成との出会い

水を張ったような艶やかさや、元は土であつたことを思い出させるざらりとした質感。手にする角度によつて、何色にも見える色彩。出嶋さんの作品は、一つの器の中にいくつもの表情が見え隠れします。ソーダ焼成は、1200度を超える窯の中に重曹を噴霧する技法。霧状になった重曹は窯の中で炎の流れに乗り、器の表面でガラス化します。炎がよく当たった部分は艶やかに、影の部分は落ち着いた風合いに。「いくつもの変化が一つの焼き物の中で破綻なくつながり、

器の表情である「景色」を作り出すのが面白い部分だと思います」

出嶋さんがソーダ焼成と出会ったのは2015年。独立前に師事していた陶芸家の松崎健さんに誘われて、ロンドンへの制作留学に参加したときのことでした。現地で初めて経験したソーダ焼成は「窯から出したら、自分が思っていない方向に進んでいた」のさう。陶芸家を目指した原点は、大学時代に入っていた陶芸サークルだという出嶋さん。炎の力が「自分の手の内を超えて面白い表現を作り出してくれる」ソーダ焼成のワクワクは、初めて土を触り、器を作ったときの驚きや喜びを強く思い出させたそうです。

帰国してすぐにソーダ焼成専用窯を築き、作品の制作を開始。「偶然の力を借りているとはいえず、焼く前は仕上がりを推測しながら器を窯に詰めていきます。全てがうまくいくことはないのですが、結果が分かっているものをやるのは面白くない。こうなるといういな

という期待に焼き物が応えてくれたり、自分が思ってもいないような景色を出してくれたり。偶然性を味方につけるような焼き方をしています」

「ない」から挑戦できる 新たな技法を駆使して

廿日市市津田に窯を開いて約14年。出身地である広島県で知り合いをたどって探したこの場所は「修業していた栃木県の益子と似た、ものづくりがしやすいのどかな地域」だそう。しかし、広島県は三角州が多く、粘土が採れない地質。地元材料を使えないという弱点もあります。

「ただ、焼き物の産地ではないからこそ、表現や材料の幅を広げ

やすいとも思います。ソーダ焼成は約50年前にアメリカで開発されたものですが、こういった新しい技法に挑戦したり、違う場所で生まれた土と技法を掛け合わせたりすることもできる。イギリスでは、自分が好きな土地で自分が作りたいものを自由に作る『スタジオ・ポタリー』というスタイルが確立されていて、日本でもこの考え方が広がっていくのではないかと思います」

作品を作るときに心がけていることは、「使いやすさと特別さ」。唇になめらかに沿う飲み口や、安定感のある持ち手のカップ。恐竜をモチーフにした遊び心あふれるオブジェ。毎日そばに置きたくなる使い心地の良さと、同じものは一つとない表現が出嶋さんの作品の特徴です。「同じ形のものを作りたいにたくさん作ることはあまり考えていなくて、焼き物の個性と使う人の個性が自然と出合っつながらいいなと思っています。僕が作ったもののなかから、『自分は



これが好き」と特別な一つを探してもらいたい。それぞれの焼き物を『これを気に入ってくれる人が必ずいるはずだから』と送り出しています」

2026年は、広島県内のイベントへの出店や、雑貨店などでの個展を予定している出嶋さん。「山にこもって作っていると、独りよがりになってしまふことがあります。だからこそ、イベントや個展は非常に大切だと考えていて。お客さまにとつてはどんな大きなものが扱えるのか、どんな感性のものが選ばれるのか。いろいろな意見に直接触れられる接客がとても好きです」

作品づくりの面では、ソーダ焼成で得た炎をコントロールする知識を生かして新窯を使用することもある。考えているそう。この場所だからこそできる挑戦が、また新しい景色を描き出します。



自在窯

・所在地／広島県廿日市市津田1178-16
・TEL／090-4127-3496
・営業時間／9:00～18:00
・定休日／土・日・祝日
こ来店の際は事前にご連絡ください。
・公式サイト／<https://jizai-gama.com/>
Instagram: @masakidejima

アップサイクルのエネルギーが

あふれるものづくりの場所



合同会社とこらば

金澤 萌さん(右)



この場所に息づく アップサイクルの力

高校生の頃、建築の仕事や職人の世界に憧れたという金澤さん。埼玉県にあるものづくり大学を卒業後、見習い期間を経て左官職人として独立。埼玉県内の商店街にアトリエを構えました。その頃行っていたのが、タイルや端材を再利用したワークショップ。左官工事の現場でたくさんごみが出るのが気になり、使えるものを持ち帰って、希望者を募り作品制作などを行っていたそうです。「でも、当時はこれがアップサイクルだとは思っていませんでした。アトリエは自分の作業場として開いたのですが、シャッターを開けたら

いろんな人が立ち寄ってくれるのが面白くて。地域と仲良くなることの楽しさは、ここで教わった気がします」

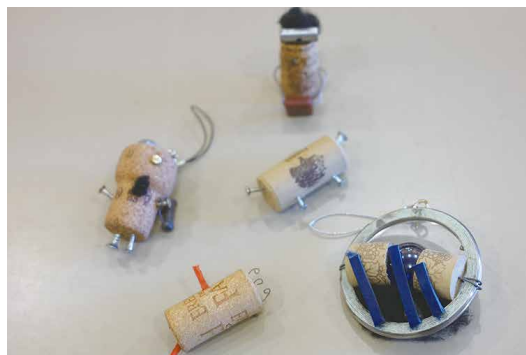
2019年に廿日市市に移住。アトリエを探していたとき、埼玉県のときと同じように商店街の中に立つ「ナガタストア」と出合い、「ここなら何かできそう」と感じたそうです。「移住していろいろな人と知り合い、地域の方たちの暮らしこそ、アップサイクルなのではないかと気づきました。おばあちゃんから受け継いだ着物をかばんにする。余った野菜を無駄にしないよう、乾燥させて保存しておく。それをお披露する場を作ったら、地域はもと元気になると思いました。そして、その行為そのものがアップサイクルだと」。店内には「作家さんコーナー」もあり、お気に入り作りの手の新作を待っている人もいます。温かな楽しさが生まれています。ワークショップで作れるものを見せてもらおうと、カラフルなタイル

ガラスの食器やレコード、手書きのポップが添えられた手作りのアクセサリー。廿日市市の津田商店街に立つ「ナガタ」には、さまざまなジャンルのアイテムが所狭しと並んでいます。手作りのカプセルトイがあったり、小部屋をのぞくと本棚があったり。陶器のかげらが飾られた壁には、あちこちにマージャンパイが隠れています。店内を見て回っていると、まるで宝探しをしているような心が弾みます。

空き店舗のスーパーを 地域の人が集まる場所に

2021年に「ナガタ」をオープンしたのは、「合同会社とこらば」代表の金澤萌さんと黒木真由さん。空き店舗だったスーパーマーケット「ナガタストア」をリノベーションし、ショップや工房、シェアキッチンなどを備えた場所へと生まれ変わらせました。

キーワードは「アップサイクル」。店内に並ぶ商品は、地域の人が持ち



を敷き詰めたフレームや、革や古布を使ったキーホルダーが。中でも人気なのは、オリジナルキャラクター「ツタッキ」のキーホルダー。飲食店のコルクはボディに、時計店の歯車は目に、グロブ店のフェルトは髪の毛に。ユーモラスな表情を作るのは、津田商店街の店から出た不用品です。「最近では高校の修学旅行のプログラムにもなっています。みんな自由に作るの楽しいですよ」「ワークショップをすると、『今までほとんどものを捨てていただけ、できるだけ捨てないようにしよう』という声を聞くことがあります。これまで『捨てずに何かできるん

込んだ不用品や、空き家から引き取ってきたものが中心です。『うちには買い取りをしていないのですが、持ち込みをしてくださる方に、『思い出の品を次の人に使ってもらえるのがうれしい』と言われることもあります。『次に使ってくれるのはどんな人かね?』『今日はどんなものが入った?』と楽しみにして、毎日のようにお店に来てくださいる方もいます」と金澤さん。店の奥にはカフェスペースもあり、地域の人の憩いの場になっています。

入口横の「アップサイクル工房」では、購入した商品などを材料にしてものづくりをすることもできます。「自分も手を動かすのが好きなので、お客さまと一緒にあれこれ作ってみたり、アイデアを出し合ったり。地域の方同士で『これどうする?』と話し合っている姿も見かけます」。左官職人でもある金澤さんは、経験や技術を生かして、ワークショップなども開催しています。

じゃないか」と考えて活動してきたので、小さなきっかけでこの気持ちが届くとうれしい。楽しいものづくりの思い出が、より豊かな暮らしにつながっていきます。



合同会社とこらば

・所在地／広島県廿日市市津田4191-6
・TEL／080-7998-9455
・営業時間／4～10月 10:30～17:00
11～3月 10:30～16:30
・定休日／火曜日
・公式サイト／<https://tocolabo.com/>
Instagram: @nagasuta.saiki

新たな命を吹き込む

「もの」に込められた時間と心をすくいあげ、



竹庵

山下 陽子さん、張 福文さん



宮島・厳島神社の裏から、大聖院に向かつてまっすぐに伸びる滝小路。2024年12月、この場所に山下陽子さんと張福文さんが「竹庵」をオープンしました。

店内にずらりと並ぶのは、茶碗やコーヒーカップなどの器や漆を使ったアクセサリ、着物をリメイクしたアイテム。山下さんと張さんが旅先で見つけたり、古い家を片付ける知人から譲り受けたりしたものを中心で。選ぶときに大切にしているのは、「もの」に宿る手作りの温かみや、手にしたときのなじみやすき。商品のジャンルはさまざまですが、どこか統一感のある、和やかな雰囲気漂っています。

金継ぎやリメイクで

「いいもの」に再び光を

器はそのまま販売することもありますが、割れたり欠けたりしているときには金継ぎをしてもう一度命を吹き込みます。

「この店では、古いものを直して

使う」ということを大切にしています。古いものや壊れたものは捨てられてしまうことが多いけれど、やっぱり文化や技術が詰まっていたものがたくさんある。直したらまた使えるし、また次の人に手に取っていただける。それがすごくうれしいんです」と山下さん。

店内には、張さんが修復した宋の時代の茶碗も。大きく欠けていたため、まず銅のワイヤーで骨組みを作り、麻の布を巻いて、その上から何度も漆を塗って仕上げたそうです。厚みがあるほど漆を乾かす時間が必要のため、修復には約1年かかったそう。張さんは「直すのには時間がかかりますが、その間にどんどん愛着が湧いてくる。古いものを直すときは風合いをできるだけ壊さないよう心がけながら、元よりもっときれいに、直してよかったと思える状態にしたいと思っています」とほほ笑みます。

着物をリメイクした洋服やバッグのなかには、山下さんの母やその友人が手作りのものもあります。



に暮らす人や観光客が金継ぎなどのクラフトを楽しむ場所を作ることも検討しているそう。この場所から「ものづくり」を通して、まだまだつながりが広がっていくそうです。



「できるだけこのまま」
宮島の工房との出会い

この店を開くまでは、中国で暮らしていたという山下さんと張さん。家でものづくりを行い、人づてに作品の販売も行っていました。が、ものづくりの「場所」をずっと探していたそうです。

「父の知り合いが宮島に住んでいたの、その縁でこの家を紹介してもらいました。築100年以上になる、宮島ろくろの工房です。初めて見に来たときにものづくりに使われていた場所だということを知って、自分たちと何か通じるものがあるような気がしました。一目見て、二人ですぐに『ここにしよう』と」と山下さん。

しかし、初めてこの場所を訪れたときは、工房の2階が崩れ、1階の作業場には木材がなだれ込んでいました。梁が落ち、立ち入ることができないほど危険な状況だったといいます。周りの人からは一度更地にした方がいいと言われたんです。けれど、工房の奥にあった土壁の温かみが好きで……。時間をかけてでもできるだけ元の姿を残しながらリフォームすることにしました。この家を譲り受けたときに、ろくろの機械にまだ木材が挟んであったんです。前にここにいらつやった方は亡くなっていたので、詳しいことは分からないけれど、

その方がものづくりをされていた空気がそのまま残っていたので、それをなくしてしまうのはもったいないと思いました」と山下さん。工房があった場所は、現在は着物や洋服の販売スペースに。土壁も当時の姿を残し、午後になると暖かな日差しを受け止めています。

「手作りのものは使いやすいし、生活を豊かにしてくれる。お気に入りのものを見つかるのももちろん、見て楽しむだけでも大丈夫。この場所で、手作り「の良さを実感してもらえたら」と張さん。店内のカウンターではコーヒーや軽食が楽しめるほか、今後は宮島

竹庵

・所在地／広島県廿日市市宮島町滝町259-2
・TEL／070-8548-7855
・営業時間／11:00～16:00
・定休日／不定休
Instagram: @chikuan_miyajima
(お問い合わせはDMにて承ります。)

鉄と木の表情を掛け合わせて

誠実に、理想を形にする



snug IRONWORKS & WOODWORKS

上村 敦芳さん

天井まで届く大きな扉を開けると、デニムのワークウェア姿で迎えてくれた上村敦芳さん。肩の部分には、シルバーの刺しゅうで「snug」の文字と、円の中に羽が2枚並んだマークが。「うちの家紋なんですよ。先祖も喜ぶかなと思つて。最初の頃に作ったんです」とにっこり。ラフな質感と、繊細な色や模様が調和しています。

鉄と木だから生み出せる 魅力を追いかけて

「昔からのづくりに興味があつた」という上村さん。高校卒業後、知人の紹介で看板制作を行う会社に就職。鉄などを加工して看板の装飾を作る仕事を担当し、工場長を務めていました。転機が訪れたのは25歳の頃。大阪府内の「ものすく格好いい」家具店を訪れたとき、鉄と木を掛け合わせた家具に初めて出合ったそうです。

「自分の中で、木の家具はきちんとしたもの、という印象がありました。でも、そこで見た家具は少し

さびたりへこんだりした鉄の質感が、木のナチュラルな風合いとマッチしていて。その斬新さに衝撃を受けたんです。木を加工する技術も身に付けて、自分でもこういうものを作ってみたいと思いました」。その後約5年鉄の仕事が続け、溶接資格免許を取得。無垢材を扱うオーダー家具店に転職しました。

鉄の加工に関わっていた期間は10年以上。がらりと変わった働き方や素材に、最初は戸惑うことも多かったそうです。「自分で決めたこととはいえ、人から何かを教えてもらうのが久しぶりだったので、それを聞き入れる難しさもありました。木は鉄より柔らかいので、傷がつきやすい。扱う機械も制作の過程も、全てが違いました。最初の3年くらいは、ついていくのに必死だったことを覚えています」

熱意に技術で応え 居心地の良い家具を

10年以上に及ぶオーダー家具店

での修業を終え、廿日市市大野に工房を構えたのは2017年。店名に冠した「snug」は英語で「居心地の良い」という意味。鉄の仕事をしていた頃からこの単語を使うと決めていたそうです。

自宅のダイニングテーブルや、ホテルのベッドフレーム、店舗のエントランスに置くスツール。工房には、個人はもちろん、デザイン会社や美容院など、さまざまな人や会社からのオーダーが入ってきます。上村さんが大切にしているのは、価格のニーズに寄り添いながらも、理想を確実に形にした家具であること。「お客さまの熱い思いを感じたら、自分の技術を生かして応えたいと思うので」。ヒアリングした

家具のイメージを実現するため、ジャンルの異なる家具店に足を運んで発想の幅を広げたり、他の木材で試作してみたり。時には、新しい機械を購入して対応することもあるそうです。

「修業をしていたときに、『頭でも3Dで描け』と言われていました。頭の中で家具を回転させて、上下左右から観察できるほど具体的にイメージするんです。長年この仕事をしてきたので、そこまではできるのですが、正解かは最後まで分からない。途中まで制作していても、お客さまや自分のイメージと違うと感じたら始めからやり直すこともあります。答え合わせができるのは、家具をお届けしたとき。『ずっと大事に使うね』という言葉や笑顔が本当に励みになります。一度、家具を見て『家族みたい』と言ってもらったことがあって、それは本当に嬉しかったですね」

虹のように光るものや、青みが強いもの。木目に違いがあるように、鉄の表情も一つ一つ違います。



「同じ素材を使っている、その表情や組み合わせ方で仕上がりは大きく変わります。お客さまの好みや使い道によって、いろいろな提案ができるのも面白い」。鉄と木を組み合わせたものはもちろん、鉄または木だけの家具にも柔軟に対応しています。

工房を訪れる人の中には、職人や独立を目指す若者も。「ものづくりに関する相談や工房の見学など、作り手同士の交流があるのは、『木工のまち』である廿日市市ならではの。若い人に工房に来てもらえるのもうれしくて、頑張っしてほしいという気持ちになります」。



snug
IRONWORKS & WOODWORKS

・所在地／広島県廿日市市
大野下更地1894-3
・TEL／0829-56-5150
・営業時間／10:00～19:00(完全予約制)
・定休日／日・祝日
・公式サイト／<https://snugfurniture.net/>
Instagram: @snug.furniture

僕もまだまだ技術を磨いて、もっと人の役に立てるようになりたい。ものづくりに対する志が同じ人たちと切磋琢磨しながら高め合っていきたいと思います」

家具に流れる時間を思い

静かなひと編みに思いを込めて



sumu.

杉原 祥太さん



小瀬川沿いに立つ1軒の古民家。蔵戸の上には、まるで満月のような明かりが一つ。グレーの壁の足元には、ぎつくりと石が積まれています。2023年に甘日市市浅原にオープンした「sumu」。店主の杉原祥太さんが、ペーパーコードの張り替えをはじめとする家具のリペアを行っています。

「直して使う」ことの 楽しさと美しさ

コンセプトは「住むように、暮らすように」。「家と同じサイズの空間で家具を見ていただきたいという思いがあったので、甘日市市の空き家バンクで見つけた古民家を自分でリノベーションしました」と杉原さん。蔵戸を開けたら少し身がかがめて、ほんのりと暗い通路を通り、メインの空間へ。「内覧に来たときから頭の中にあつた」という空間を目指し、約9カ月かけて少しずつ修繕を行ったそうです。

メインの空間は約20畳。壁は白の漆喰、床はオークのフローリング

で静かな余白を感じる空間です。

壁際に並ぶのは、1960年代に作られたデンマークのビュローやキャビネット、リペアを待ついくつかの椅子。「椅子はお客さまから依頼を受けて対応しますが、ビュローやキャビネットなどは販売しています。店には当時の姿のまま置いていて、この家具が欲しいという方がいらついたらそこからリペアして、一番いい状態でお渡しすることになっています」

もともと古い家具が好きだったという杉原さん。社会人になった頃から、趣味として古い家具を買って直していったそうです。「ヴィンテージ家具の魅力は経年変化ですが、これは人間の手で作れるものではありません。例えば、新しい椅子を今買ったとしても、100年後の姿を見ることはできないですね。それなら僕は60年前の家具を買って、直しながら40年間使うことで100年後の姿を見てみたい」

店で扱う北欧の家具の中には、「直して使う」文化がにじむもの。

「ふたを開けると、使われていた跡やちょっと修理した跡が残っている。そういうのを見つけると、すごくすてきだなと思います」

これからの暮らしに 長く寄り添えるように

杉原さんが得意とするのは、「カール・ハンセン＆サン」のYチェアの張り替え。造形の美しさと座り心地の良さが人気の、世界各地で愛される一脚です。「僕にとっても、自分で最初に買った思い出の椅子。昔、座面を張り替えたくて広島県内でお店を探したのですが見つからなくて。自分で本を見ながら直したのが張り替えを始めたきっかけです」

座面の材料は、「ペーパーコード」と呼ばれる樹脂を含んだ紙ひも。手作りの台にYチェアをしつかりと固定し、その周囲を杉原さんが回りながら、座面の外側から内側に向かって編んでいきます。ペーパーコードがすれる音、床を打つ音。紐の幅は3mmほどです。「地道でしょう」と笑う杉原さんの手元を見ると、手袋から親指だけが顔を出しています。

「目の詰まり具合や中心に向かうラインがずれないように、親指の腹で力加減を感じるのが大事なんです。ラタンや布の張り替えも経験してきましたが、ペーパーコードは同じ椅子のフレームでも毎回仕上がりが微妙に違うのが面白くて難しい。握力や集中力などその日のコンディションに影響を受けることもありませんが、僕は指先の感覚一つで座面を編むのが格好いいなと思います」

リペアの依頼があるYチェアの状態はさまざま。背面の色や座面の変化の一つ一つにその椅子と持ち主の物語が詰まっています。「椅子を持つてきてもらったら、コーヒーを



飲みながら購入したときのことやどんなことがあったのかなどを1時間くらいうかがうようにしています。編むときは丁寧で、乱れが出ないよう、ひと編みひと編みに集中。この先10年は使ってもらっているので、お客さまのお話やお顔を思い浮かべて、納得いくものをお届けできるよう頑張っています」

最近ではYチェアの張り替えだけでなく、ペーパーコードを取り入れたカーテンタッセルなどの小物作りにも取り組んでいます。設計士などからの依頼で、ペーパーコードの建具を作ることもあるそう。

「椅子の座面に使うものという常識を覆して、ペーパーコードの幅を広げていけたら。唯一無二の存在を目指したいと思っています」



sumu.

・所在地／広島県甘日市市浅原2763
・TEL／090-2115-0387
・営業時間／アポイント制
（ご来店の際は事前にご連絡ください）
・公式サイト／
<https://www.sumu-interior.com/>
Instagram：@sumu_hiroshima

木の美しさを磨き、引き立て

多様な暮らしになじむテーブルに



一枚板のテーブル工房 きくら

常藤 辰徳さん



流れるような年輪の中に力強い節が残るブラックウォールナットや、水面の揺らぎのような模様が目を引く柃、赤みの強い木肌と整った木目が特徴のポセ。木の香りが漂う店内には、天井に届くほど大きな一枚板がずらりと並んでいます。壁に立てかけてあるとその迫力に圧倒されてしまいますが、テーブルに変わるとぐんと優しい表情に。木の美しさはそのままに、心地よい存在感を放っています。

祖父と父の背中を追いつ銘木と家具作りの世界へ

「一枚板のテーブル工房きくら」は1960年に「常藤家具製作所」として創業。当初はメーカーに卸す家具の生産を行っていましたが、約25年前にオーダーメイド家具の制作に舵を切りました。

「メインは一枚板のテーブルですが、椅子やたんすを作ることもあります。無垢材の家具であれば何でも作りますよ」と話すのは、三代目の常藤辰徳さん。社長である祖父の

善喜さんや父の鈴木徳俊さんとともに、一枚一枚表情や性質が異なる木や、家具作りに向き合っています。

のこぎりで木を切つてパズルを作るなど、子どもの頃から工場で遊んでいたという常藤さん。中学卒業後は、木工芸を学ぶ北海道おといねつ芸術高等学校に進学しました。「ちよつとみんなと違うことをしてみようかな、というくらいで。そんなに深くは考えていなかったんです」。常藤さんは笑いますが、15歳での大きな決断に家具作りへの熱意がにじみます。その後、宮大工や家具職人を育てる富山県の職藝学院や建具屋で修業。22歳のとき、廿日市市に戻ってきました。

テーブルになる一枚板は、岐阜県などの銘木市場で常藤さんが自ら買い付けます。木目はどれだけ詰まっているか、節はあるか、割れたり反ったりしそうでないか。そして何より、長く使う家具の表情として選んでもらえるかどうか。

数えきれないほどの項目を確認しながら、一枚一枚目利きをし、落札していくそうです。「銘木市場は本当にワクワクする場所。世界中から集まった、樹齢数百年の木の板が何百枚と並んでいるんです。それが毎月開かれて、大量の板が出入りしている。すごい世界ですよ」

機械の力と伝統の道具を掛け合わせて

買い付けた板は水分を多く含んでいるため、まずは水分量が10パーセント台になるまで工場です自然乾燥させます。平均して1年から2年ほどですが、木によつては10年以上かかることも。その後、エアコンなどで乾燥する室内でも

割れないよう、人工乾燥機で調整。店頭と並べ、注文が入った後に加工を始めます。

乾燥による反りや曲がりには、CNCというコンピューター制御の機械で素早くフラットに。仕上げにかななをかけ、いつまでも触っていたくなるようなめらかな手触りや木目の美しさを引き出します。「僕はかななやのこぎりなど、伝統的な道具を使った手加工も大切にしています。生産性を上げることも重要ですが、やっぱり手加工だからこそたどり着ける仕上がりがある。天板一枚を仕上げるのには約3日かかりますが、その大半はかなながけです。テーブルの場合は、何百回、何千回と削っています」

仕上げは植物性のオイルを重ね塗り。木そのものの艶が引き立ち、光が当たると柔らかな空気を漂わせます。脚は木だけでなく、スチールと組み合わせることもあります。「木の素材感を生かした仕上げがうちのテーブルの特徴。



自然な艶なので、現代の暮らしや洋風のリビングにもよくなじむと思います」

何百年も生きてきた木と出合い、長い時間をかけてその美しさを引き出したテーブルは一生もの。「お客さまが選んだ木をテーブルに仕上げたとき『あの木がこんなにきれいになるんだ！』と喜んでいただけるよう、毎回『行けるところまで行こう』と気合が入ります。愛着を持つていつまでも使ってもらえるよう、引き出しなど細部の使いやすさも意識しています」

購入後のメンテナンスももちろん可能。テーブルに続いて、学習机

など他の家具を注文する人も多いそうです。「長く続くありがたいお付き合いを大切にしていきたい」。三代にわたつて、確かな技術と温かな気持ちが受け継がれています。



一枚板のテーブル工房 きくら

・所在地／広島県廿日市市宮内4188-2
・TEL／080-4263-2479
・営業時間／10:00～17:00
・定休日／水・木曜日
Instagram: @tatsunori_tsunetou

確かな技術とつながりで家具の可能性を

どこまでも広げる



野地木工所

野地 由孝さん

丸太とトタンで作られたガレージに掲げられた「野地木工」の看板。中へ進むと、出来たての家具をトラックに乗せている真つ最中。工場の前には、その様子を見守るようにいくつかの機械が並んでいます。頑丈で実直。そんな言葉が似合う表情は、長くこの場所で活躍してきたことを想像させます。

父が始めた工場 受け継いだ技術とともに

1970年、廿日市市深江で創業した「野地木工所」。現在は代表の野地由孝さんと弟の東進さんがオーダー家具の制作を行っています。「僕が5歳の頃、父がこの工場を始めました。もともとは婚礼家具を作る会社に通っていたのですが、独立してオーダー家具を作ろうと。当時の僕にとっては、工場も家のようなもの。学校から帰ってきたらいつもここで遊んでいました」と野地さん。高校を卒業した後、約1年間自動車関連の会社で働き、「野地木工所」に戻って技術を磨い

てきました。

家具の種類や素材は限定せず、「何でも注文があったものを作る」のがこの工場のスタイル。同じものは一つとないことが売りであり、作り手としての難しさでもあったそうです。「作るものが毎日違ううえ、板もベニヤから組むんです。子どもの頃から見ていても、やっぱりすぐにはできませんでした」。野地さんの父の信条は「技術は見て盗むもの」。技術の習得には20年以上がかかったそうです。

家具の制作も修理も 真心をこめて

地域に住む人や広島県内の企業などから入ってくる注文は、その方法も内容もさまざま。個人の場合は希望するイメージを聞き取り、時には提案を行いながら理想の家具を実現すること、ハウスメーカーなどの場合は設計書の通りに正しく制作することが求められます。「既製品であれば店頭で確認してから買うことができますが、

オーダーの場合は完成品のイメージがお客さまの頭の中にしかない。個人のお客さまの場合は、まずは僕が話を聞いて簡単なスケッチを描く。それを弟が図面にして、またお客さまに見てもらいます。想像した場所に、想像したものを作るために、素材やサイズ、塗装の種類などをしっかり打ち合わせします」

テレビ台やデスクを組み込んだ階段や、木目を生かした温かみのあるキッチン、建具との統一感が美しい洗面台。これまでに野地さんが制作してきた家具を見ると、その多様さに気づきます。素材も柄も、サイズも決まっていなくても、雰囲気も設置場所も思いのまま。採寸、設計、組み立てはもち

ろん、塗装や取り付けまで一貫して行っているのも強みです。

ハウスメーカー向けの家具は、洗濯機や冷蔵庫など、設置する家電製品がびつたりと収まるサイズで制作することも多いそう。オーダーメイドの強みが存分に発揮される分野です。制作途中のキッチンを見せてもらうと、角材をベニヤ板で挟んだものが、「これはキッチンの棚になります。棚受けを付けたところには、こうやって芯を挟んでいます」。家具を使うときには見えない部分も、緻密な設計と確かな技術によって支えられています。

今でも「何でも注文があったものを作る」姿勢は変えていないそう。これまでに、今は作る人がいなくなつたというろかい舟の櫓など、家具ではないものを作ったことも。無垢のテーブルを塗装し直したり、アンティークの椅子の座面を張り替えたり、家具のメンテナンスの相談も受け付けています。工場に対応することが難しい場合は、長く付き合ってきた材木店や工務店など



と連携。家具やものづくりに関する相談を一手に引き受けています。

先代の頃から変わらず大切にしているのは、「真心を込めて作ること」。「どんなに忙しくても、目の前のことをどんどん流していかないようになっています。一つ一つ、お客さまが使われるところを想像すると、隅々まで意識が行き渡ります」。仕事の中で嬉しい瞬間は、と尋ねると「お客さまが喜ぶのが一番。引き渡し前の新築の家に行くことも多くて、なかなかその場面には出合えないけれど」と笑う野地さん。「でも、想像通りとか、想像以上

とか言ってもらえたら、やっぱりうれしい」。家具作りへの情熱が、静かにともっています。

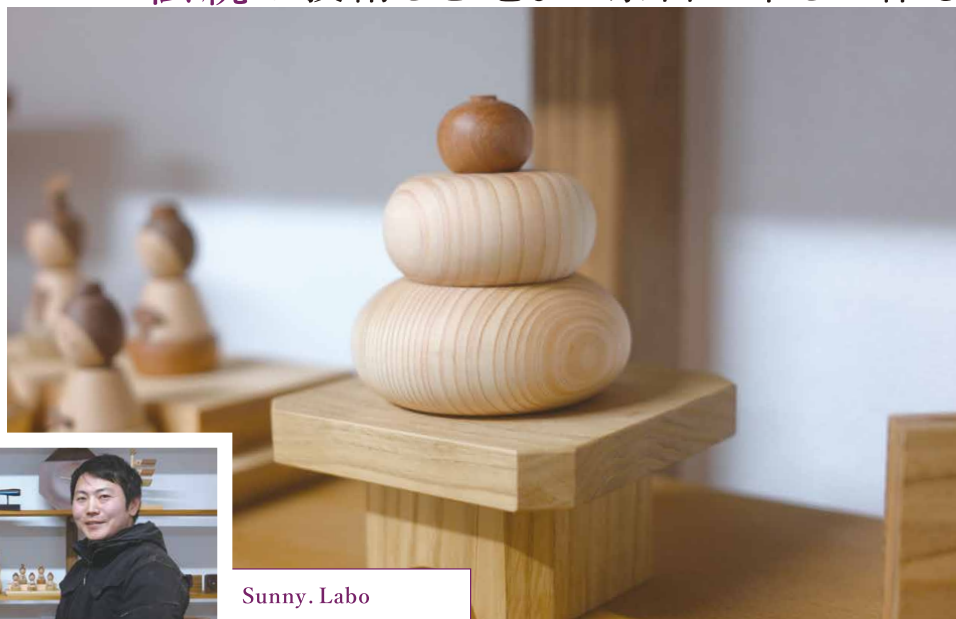


野地木工所

・所在地／広島県廿日市市深江3-12-18
・TEL／0829-56-0335
・営業時間／8:30～17:30
・定休日／土・日・祝日
・公式サイト／<https://www.nojimokko.com/>

伝統の技術と心地よい余白で木と工作を

愛する心を育てたい



Sunny. Labo

岩田 勇真さん



伝統の木工技術を 守っていくために

岩田さんの父は、「イワタ木工」を創業した清志さん。岩田さんも小学生の頃から、書道筆の軸やけん玉を製造する手伝いをしてきました。木工歴は30年以上。しかし「本気になったのは大学を卒業してからなのだそうです。」

「大学では建築の勉強をしていて、その道に進もうと考えたこともありましたが、でも、今の建築には組み立て式のものが多くて、僕は自分で考えたものを自分の手で作るほうが楽しいと思うようになったんです。それで戻ってきたの

古くから「木工のまち」として知られてきた廿日市市。2025年、この町に木工に関わる新たな会社「Sunny. Labo」が設立

されました。代表を務めるのは岩田勇真さん。木工職人として長年培ってきた技術を生かして、天然木を使用したオリジナル生活雑貨を製造、販売しています。

ですが……やっぱり木工が好きなんでしょね」

「イワタ木工」が得意とするのはろくろ加工。機械に木材を固定して回転させ、刃物を当てることで、なめらかな手触りの球や軸を削り出します。無駄なく、美しく木材を加工するため、鉄を削る機械の刃物や回転数などをカスタマイズして使うことも多いそうです。「技術が進歩していく中、デジタルを駆使して新しいことをやっていくのも大切。その一方、僕は伝統的なろくろの技術や知恵も守っていきたくたんです。父はまだ製造を続けているので工場もあるし、現役の職人さんも頑張っている。でも、これを残すにはあと10年先では遅いかも知れない。今から行動するべきだと思いました」

木をもっと身近にする 温もりのある商品と体験

「Sunny. Labo」で販売するのは、木材の質感を生かした、暮らしに取り入れたいくなるような

商品。清志さんの仕事を手伝いながら、岩田さんが一つ一つ丁寧にろくろを使って製造を行っています。ショールームには、手になじむ国産ヒノキのカップスリップや、木材そのものの色を生かした木の鏡餅などが並んでいます。ろくろ加工によって木目の美しさが引き出された作品は、全て一点もの。優しく漂う木の香りにも癒やされます。

「木目の個性や手作業の味を残した、柔らかなさのある商品を作りたいと思っています。これまでは正確さや緻密さを重視していたのですが、みんなに喜んでもらえるものはいつもそうとは限らないと最近では考えていて。あの木目いいね、この感じもありだね、と選んでい

ただける、余白のあるものづくりを心がけています」

すらりと並ぶ作品のなかには、企業とのコラボレーション商品もあります。「Sunny. Labo」を設立してから、「いろいろな人が工場に来てくれるようになった」と岩田さん。透かしのデザインが目を引くドリップスタンドは「ハリオ」のコーヒーウェアシリーズ「AYA」の商品として展開されています。「イワタ木工」では、ろくろ加工に特化してきましたが、「Sunny. Labo」では板物などこれまでに取り組んでこなかったジャンルのものも作っています。レーザー加工なども駆使して、思い描いたものを形にする喜びを改めて感じています」。広島県内の事業者とのつながりも増え、お互いの工場や工房を見学することもあるそう。「マルニ木工」でもらった革の端材をアクセントにした名刺入れなど、交流をきっかけに生まれた商品もあります。

岩田さんがもう一つ力を入れてい



るのが、子ども向けのワークショップ。近隣の公民館や平和記念公園のレストハウスなどを会場に、木のおもちゃづくり体験を行っています。「学校のカリキュラムが変わり、木や工作に触れる機会が減ってきています。そのなかで、僕は子どもが木に触れる機会を増やしたい。触れれば自然と興味を持って、好きになつていくと思うので」。端材を利用したキットに色を塗って、マグネットにしたり、積み木にしたり。ワークショップのたびに増えてくれる子どもたちもいるそうです。

「木工は工房によって作り方も考え方も違います。それはどれも正解

で、自分が追求したものが実現できるかということが大切。商品が売れるのもうれしいですが、これからは木工に興味を持つ子どもを増やす活動に力を入れたいというのが僕の今の考えです」



Sunny. Labo

・所在地／広島県廿日市市栗栖611
・TEL／090-3635-1282
・営業時間／8:00～17:00
・定休日／土・日・祝日
・オンラインショップ／
<https://sunnylabo.base.shop/>
Instagram: @sunny_labomister

「今できること」から生まれた

変化を楽しみ、愛おしむかばん



Crude.yamada

山田 文子さん

工房の窓から見えるのは、キラキラと輝く瀬戸内海。遠くには数隻のフェリーがゆつくりと行き交っています。「厳島神社の鳥居も見えるんですよ。工房の前にシカやキジが来てびっくりすることもあります。海も山も近くて、自然が豊かなところですよ」とほほ笑むのは、山田文子さん。宮島の対岸で、帆布を使ったかばん作りを行っています。

思わぬところで出合った かばん作りの面白さ

昔からのづくりが好きで、美術系の短期大学に進学した山田さん。卒業後は飲食店や服飾店を展開する会社に就職し、飲食部門で働いていました。しかし、雑誌で読んだ靴職人の記事に感銘を受け「やっぱりものづくりがしたい」と退職。兵庫県神戸市にある靴職人の教室に短期間通いました。「どうしたら靴職人になれるんだろう」ときつかけを探して入学したのですが、靴作りの難しさを痛感

しました。工程が複雑で、道具もたくさん必要で、靴を作る人は何でも作れるのではと感じたくらい高度な技術が必要だったんです。自分のスキルではとてもじゃないけど務まらないと思って、広島に戻ってきました」

それでも忘れられなかった靴の仕事。「一から作るのではなく、縫製だけの仕事もある」と聞いた山田さんは「ポストミシン」と呼ばれる靴向けのミシンを購入しました。しかし、仕事を始めるには技術はもちろん、人とのつながりも必要。なかなか仕事が見つからない日々が続いたそうです。

ところが、その頃再会した前職の社長から思わぬ誘いがありました。「自分の都合で退職したので、神戸で勉強してきたことや帰ってきたことを報告に行っただけです。そうしたら『明日から服飾部門にかばんを作りに来て』と言ってもらつて。驚いたけれどありがたいと思って、もう一度お世話になることにしました」

もすてきだと思ってももらえているのなら、すごくうれしい。いろいろなニーズを取り入れて、今できることを考えながら、より良いものを作っていきたいです」



はじくとポンと跳ね返されてしまふほど、硬く丈夫な生地です。「帆布を選んだのは、ポストミシンで縫えるからなんです。このミシンは針が下りてくるところが突き出ている、立体には最適なのですが、柔らかい生地が縫えない。これですればかばんが作れるかと考えて、帆布にたどり着きました」。かばんの外側に顔を出すかわいらしい三角マチが作れるのも、このミシンだからこそ。通常は薄い生地に変えることが多い底とマチの二重になっている部分にも同じ厚みの帆布を使っているため、背の高いかばんもしっかりと自立します。最初は硬くてもだんだんと味が出てくるのも帆布の魅力。少しずつ柔らかくなったり、色が変わってきたり。アクセントになっている銅や真鍮の金具、革の持ち手も、味わい深い色合いに変化します。「新しいものがクタクタとしてくると、自分のものになった感じがしませんか？少し破れてしまっても、修理したらもつと愛着が湧く。

初めて経験するかばん作りは「想像以上に面白かった」と山田さん。「かばんを買うときはデザインや機能性を見て何となく選んでいたのですが、持ち手の幅、マチの大きさ、ポケットの数などたくさん要素が関係していることに気づきました。作り手になって初めて、かばんはこんなに奥が深いのかと考えることがたくさんあるのがすごく楽しかった」

味が出る帆布が主役 使うことで自分のものに

山田さんが作るかばんの素材はロウを染み込ませた帆布。指で

Crude.yamada

・所在地／広島県廿日市市(詳細非公表)
・オンラインショップ／
<https://crude.thebase.in/>
MAIL／crude.yamada@gmail.com
Instagram：@crude.yamada